

■ 論 文

コミュニティソーシャルワーカーによる 子どもの支援の展開可能性について ——子どもサロン「もりもり元気食堂」の実践の軌跡から——

加藤 昭宏*

Development Possibility of Support for Children by Community Social Worker:
From Tracks of Salon for Children “Morimori Genki Cafeteria” Practice

Akihiro KATO

キーワード：コミュニティソーシャルワーカー，地域包括ケアシステム，子ども食堂，地区社協，地域共生社会
Community Social Worker, Community Based Integrated Care System, Children Cafeteria,
Municipal Social Welfare Council, Regional Cohesive Society

1. はじめに

——問題提起：子どもの為の地域包括ケアシステムは構築されているのか

1-1. 子どもの為の地域包括ケアシステムの構築及び子ども食堂の展開可能性

我が国では、団塊世代が全員75歳を超える「2025年問題」を見据え、医療、介護、福祉のサービスが包括的・継続的に提供され、生活上の不安や危険に対し概ね30分以内に、24時間365日サービスが提供される仕組み、つまり「地域包括ケアシステム」の構築を推進している。地域包括ケアシステムは、「元来、高齢者に限定されるものではなく、障害者や子供を含め、地域すべての住民にとっての仕組み」（地域包括ケア研究会編，2013：7）であり、「地域包括ケアシステムを高齢者介護の問題と限定するような考え方から脱却することがまず重要」（同上：7）と言われてきた。

しかし、これまで高齢者の支援に特化した事例が報告

されており、子どもの支援システム構築の為の積極的な議論は見受けられない¹⁾。

これまで加藤・有間・松宮（2015）では、地域包括ケアシステム構築の中心的な推進主体が地域包括支援センターとされている（地域包括ケア研究会編，2013：10）状況に対して、①高齢者への限定の問題、②地域包括ケアシステムの政策課題の2点から、地域包括支援センターでは不十分であることを指摘した。その上で、「サービスの提供側だけではなくサービスを受ける側、つまり高齢者を含めた住民のマネジメントを同時に考える必要があることなどから、「高齢者、障がい者、子ども分野などの『制度のマネジメント』機関ではない」社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW）が推進主体となって地域包括ケアシステムを構築していく必要があることを示した（加藤・有間・松宮，2015：20-21）。

現在、我が国では新たに、地域包括ケアシステムの拡大・深化版²⁾として、我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現を目指している。この「地域共生社会」の実現の

* 愛知県立大学人間発達学研究科博士後期課程在籍

為には、1. 他人事を「我が事」に変えていくような働きかけをする機能、2. 「複合課題丸ごと」「世帯丸ごと」「とりあえず丸ごと」受け止める場、そして3. 市町村における包括的な相談支援体制の3つが必要としている（地域力強化検討会編，2017）。

この中で、とりわけ「『我が事』の意識の醸成」（同上：6）の為には、「地域にとっての『触媒』としてのソーシャルワークの機能が、それぞれの『住民に身近な圏域』に存在していること」（同上：12）が必要である。加えて、「地域から排除されたり、一部の人から強く拒否されている人への支援については、ソーシャルワーカーが専門的な対応をしていく中で、徐々に地域住民と協働」（同上：14）し、「『一人の課題から』、地域住民と関係機関が一緒になって解決するプロセスを繰り返して気づきと学びが促されることで、一人ひとりを支えることができる」（同上：7）と、ソーシャルワーカーの役割や、地域住民との協働の重要性を強調している。「地域共生社会」の実現の為には、「住民のマネジメント」（加藤・有間・松宮，2015：20）を行うCSWの必要性も同様に高まっているといえるだろう。

また、「各地で広がっている『子ども食堂』もその一例ということが出来るかもしれない」（地域力強化検討会編，2017：6）と、子ども食堂が「『我が事』の意識の醸成」（同上：6）の為の「触媒」となる可能性についても示唆している。

しかし、子どもの為の地域包括ケアシステムの構築における議論と同様、これまで子ども食堂の実践が地域包括ケアシステムの構築、あるいは我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現との関連の中で議論されることは少ない³⁾。

一方で、子どもは、「市役所の窓口や閉じられた相談室などで本音を吐露することはまれであり、一緒にご飯を食べながら、一緒に遊びながら、そうしたごく日常的な状況のなかで、初めて自分の気持ちを解放できる」（山野，2016：373）のである。このことから、子ども食堂は、子どもの抱える不安や子育て不安を抱える世帯の早期発見・早期対応ができるコミュニティ作りや、「『我が事』の意識の醸成」（地域力強化検討会編，2017：6）に寄与し、我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現においての重要な一翼を担える可能性があると考えられる。

1-2. 本研究の目的と方法

本研究の目的は、次の2点である。

第1に、地域包括ケアシステムの推進主体として、「住民のマネジメント」を行うCSWが、子どもの為の地域包括ケアシステムの構築の為にどのような支援を展開できるのか、その展開可能性及びそこで必要となるCSWの機能について、実践事例から考察することである。

第2に、子どもの為の地域包括ケアシステムの構築、つまり我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現に際して、子ども食堂がどのような役割を担うことができるか、実践事例の検討を通じて展開可能性を探ることである。

本研究の方法としては、次の通りである。

ソーシャルワーク実践として全世代・全対象型の地域包括ケアシステムの構築を住民とともにに行っている社会福祉法人長久手市社会福祉協議会（以下、長久手市社協）における、CSWを中心とした「長久手版」の地区社協について概観し（2.）、西小学校区地区社会福祉協議会（以下、西小地区社協）「子育て不安軽減部会」企画の子どもサロン「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」の3年間の実践の軌跡を辿り（3.）（4.）（5.）、そこから、CSWによる子どもの支援の展開可能性及び機能、そして子ども食堂の展望について考えていきたい（6.）。

子ども食堂は、現在、全国的に注目を浴びている、東京都豊島区で無料塾やプレイパーク、子ども食堂を運営する「NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」（川越・栗林，2016；山野，2016）をはじめ、大阪市正野区のNPO法人CPAO、京都市山科区のNPO法人山科醍醐こどもの広場、大阪府羽曳野市のHabikino Children's Support Network、東京都大田区の気まぐれ八百屋だんだん、福岡県北九州市における行政直営型や、滋賀県社会福祉協議会に拠点を置く「滋賀の縁創造実践センター」によって展開されるもの（吉田，2016）など、草の根的にまた地方自治体によって様々な形で全国各地に相次いで誕生している（藤沢，2017；松岡，2017）。

これまで、子どもの貧困問題（藤沢，2016）はもちろん、子どもの居場所づくりや学習支援の機会の提供等、子どもの生活を地域で支える（吉田，2016）為にも子ども食堂は展開されており、教育の一環であることはもとより、社会保障の一環である（藤沢，2017）という視点

や、地方都市における実践は「地域から個人がスティグマ化されることがないように福祉的な地域実践を行わなければならない」（松岡，2017：109）とする指摘など、それぞれの目的や実施主体、地域の実状に応じた実践報告がされている。子ども食堂が多様な機能を有していることについて吉田（2016：365）は、子ども食堂が有する機能として、食を通じた支援、居場所、情緒的交流の3つを有しているという仮説を提唱しているが、全国で急速に広がりを見せていることから「全体像の把握や意味づけがまだ十分にはなされていないのが現状」（同上：366）としている。

これらを踏まえ本研究では、CSWの支援展開可能性や機能について考察する為に、CSWが子ども食堂の企画・運営に携わっている長久手市社協の実践を取り上げていきたい。長久手市社協では、①CSWによる住民のマネジメントを基盤とした地域包括ケアシステムの構築（加藤・有間・松宮，2015，2016）と、②“制度の狭間”を取り巻く“内的世界における生育歴上の二次障害”と、“外的世界における現在の二次障害”に対するCSWの支援展開⁴⁾（加藤，2017）とを円環的に相互作用（交互作用）させることが、地域包括ケアシステム構築とコミュニティソーシャルワークとの理論的統合により可能となるCSWのあり方であると捉え、実践を行っている。長久手市社協の事例から、子ども食堂実践が、「地域共生社会」の実現に寄与する為に必要な基盤についても確認していきたい。なお、本研究で扱う事例については、倫理的配慮として個人が特定されないようにしていただくとともに、子どもサロン「もりもり元気食堂」の実践の掲載については長久手市社協の許可を得ている。

2. 長久手市社協におけるCSW及び地区社協の実践

——地域包括ケアシステムの構築を目的とした「長久手版」地区社協

長久手市では、全世代・全対象型の地域包括ケアシステムの構築、つまり我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現を目的として、CSWを中心とした地区社協にて様々な実践がなされてきた。まずは、子どもサロン「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」の基盤となる「長

久手版」の地区社協を概観しておきたい。

長久手市社協では、「今後の地域包括ケアシステムを念頭に、実際に地域福祉の重要な役割を担う組織」（長久手市・社会福祉法人長久手市社会福祉協議会編，2014：61）として、地区社協を位置付けている。

これは、他市町ですでに設置されている地区社協の形態とは一線を画している。一般的な地区社協は、自治会や民生委員・児童委員、子ども会、シニアクラブ、防災関係者等の様々な団体の代表が参加し、主に地域の敬老会やお祭り、餅つき大会など季節の行事を中心に運営される、いわば「イベント中心型」である。しかし、地区社協が設置され20年以上が経過しても、「いつも参加する人が同じである」、「困り事が中々発見されない」という他市町の社協職員の声を受け、イベント型の地区社協ではなく、「地域住民が見守りの必要な方などに気づいたときに、いかに早く専門家につなげることができるか、その仕組みを住民の方とともに話し合い、作っていく地区社協」（同上：61）を独自に設置することとしている。長久手市社協における地区社協設置の目的については、以下の通りである。

小学校区を単位として、全世代・全対象型の地域包括ケアシステムの構築、つまり我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現を目指し、認知症の予防、閉じこもり・ひきこもりの防止、子育て不安の軽減を中心に、発達障がい、うつ病、自殺、アルコール依存症、孤立死、虐待、MCI（軽度認知機能障がい）などの新たな社会問題と言われる、地域の中に隠れた「潜在的ニーズ」に特化し、地域へ出向く「アウトリーチ（訪問支援）」活動を主として、CSWによる「住民のマネジメント」を通じ、早期発見・早期対応ができる「感度の良いコミュニティ」を地域住民とともに作る。

また地区社協の組織図については、運営委員会とテーマ部会の二部構成となっている。運営委員長はCSWである。運営委員会はCSW、民生委員・児童委員、自治会連合会（まちづくり協議会）役員で構成されている。毎月1回、運営委員会を行っており、各部会の活動報告、CSWの新規相談ケースとその対応についての共有、民生委員・児童委員や自治会連合会（まちづくり協議会）からの活動報告等を行っている。

ここで注目すべき点として、次のことが挙げられる。

運営委員会におけるCSWの相談ケースの共有については、具体的な相談ケースを通して、個別支援から地域支援、仕組み作りというCSWの3つの役割（野村総合研究所編、2013：18）をも運営委員と共有していることである。これにより、「『一人の課題から』、地域住民と関係機関が一緒になって解決するプロセスを繰り返して気づきと学び」（地域力強化検討会編、2017：7）を促し、「『我が事』の意識の醸成」（同上：6）を図ることも目的としているのである。

部会に関しては、①認知症予防部会、②閉じこもり・ひきこもり防止部会、③子育て不安軽減部会の3つのテーマがある。各テーマ部会長はCSWである。部会員は、「見守りサポーター ながくて」⁵⁾や各テーマに興味関心のある方、当事者やその家族など地域住民であれば誰でも参加可能となっている。

地区社協が2015年に3小学校区に設立後、3つのテーマ部会に沿った内容で、小学校区内の集会所等を利用して月に1回地域福祉学習会⁶⁾を行ったり、子育て応援冊子『あさがお』⁷⁾を発行したり、集会所を使ったお母さんのレスパイト企画「お母さん子育て休憩作戦」を行ったり、地域で暮らし続ける意識を高める為に高齢者施設を見学する「施設見学ツアー」を開催したり、独居高齢者や障がいのある方を対象に定期的に絵手紙を送る企画を行ったり、車イスやオムツに関する講座など様々な講座を行ったりしてきた。

それでは、これらの基盤のもと、論者の担当する西小学校区において地区社協設立当初からの目玉企画⁸⁾として取り組んできた子どもサロン「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」について、3年間の実践の軌跡を辿り、CSWによる子どもの支援の展開可能性やCSWの機能について、そして「地域共生社会」の実現においての子ども食堂の展開可能性について、考えていきたい。

なお、3年間の活動を便宜上以下の3つの時期にわけ整理した。すなわち、1. 開催にあたっての企画・準備期間である初期（3.）、2. 「我が事」の意識醸成がなされた第二期（4.）、3. 実際に地域ニーズを住民が拾い、更には地域支援事業にまで発展させられるようになった第三期（5.）の3つである。それでは、順にみていきたい。

3. 「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」初期

——開催にあたっての経緯、企画

3-1. 開催の経緯

地区社協設立後、認知症予防部会、閉じこもり・ひきこもり防止部会、子育て不安軽減部会の3つの部会立上げについて運営委員会で検討された。その際、一委員（現在の副運営委員長）のO委員とCSWとが話をしたことがきっかけとなった。それは、NHKで子ども食堂について取り上げられていた番組をみて、「これを長久手市でもできないか」という相談であった。同時に、子どもの貧困が6人に1人（16.3%、当時）と言われているが、「本当に市内に貧困の児童がいるのか、民生委員・児童委員の感覚としてもわからない」⁹⁾とのことであった。

話し合いの中で、地区社協の目的である「感度の良いコミュニティ」作りを達成する為、「貧困対策」を前面に打ち出すことは避けることとなった。名称を「子ども食堂」ではなく、子どもサロン「もりもり元気食堂」としたのもその為である。誰もが参加でき、楽しく食事とともにしながら、そこにCSWもあり、また民生委員・児童委員や主任児童委員らも運営スタッフとして参加することで、子育て不安や悩みを抱えている世帯、また不安を抱えている子どもの声を拾えるようにしようと、運営委員会内で共有がなされた。

3-2. 事業目的及び概要

本事業を実施するにあたり、CSWが企画書を作成¹⁰⁾し、目的、概要、課題、対策等について社内にプレゼンし、また地区社協運営委員と話し合いを行った。

それでは、運営委員と話し合われた内容及びCSWの対応について、企画書における目的や概要を中心にそれぞれ確認していきたい¹¹⁾。

3-2-1. 事業の目的

本事業を行うにあたって、CSWの目的としては、以下の3つとした。すなわち、子どもに安価に食事を提供する場を設けることにより、1. 子育て不安を抱えた世

帯の早期発見・早期対応が出来る仕組みを住民とともに作る、2. 貧困や孤食などのニーズに対応する、3. 運営する民生委員・児童委員や地域住民の発見機能及び解決力を向上させる、の3つである。順にみていこう。

1. については、上述の通り、地区社協の目的である「感度の良いコミュニティ」作りを目的とする為、「貧困対策」を前面に打ち出すことは避けた。幅広く参加者を集い、楽しく食事をともにしながら、そこにCSWもおり、また民生委員・児童委員や主任児童委員らも運営スタッフとして参加することで、子育て不安や悩みを抱えている世帯、また不安を抱えている子どもの声を拾えるようになることを目的とした。これにより、発達障がいのある子ども本人からの相談（4-2.）や、元々市役所、主任児童委員らが介入を試みていた、支援の必要性がある世帯の生活状況や母子関係の把握（5-1.）につながったケースがあった。

2. については、「貧困対策」を前面に打ち出すことは避けたが、同時に、貧困世帯でも参加しやすいことを前提とした¹²⁾。運営委員会にて話し合った結果、食事代については給食費に準じて一食250円とした。また、これを実現する為に、自宅で野菜を育てている方等近隣住民から、野菜、果物、お米、お肉等の寄付を募ることとした。結果として、3年間とも基本的には参加費収入のみで賄うことができた。

3. については、地域住民とともに企画し、実施することで、単に早期発見・早期対応ができる「居場所」や「仕組み」を作るだけではなく、運営に関わる民生委員・児童委員、主任児童委員、「見守りサポーター ながくて」らの発見機能を強化し、住民の「地域で子育てをする」という意識を醸成すること、すなわち『我が事』の意識の醸成（地域力強化検討会編、2017：6）も、CSWとして本事業を企画する目的の一つとした。企画（計画）から運営（実行）、反省（評価）、次年度の実施（改善）というPDCAサイクルを住民と共に繰り返すことによって、詳しくは後述するが、「夜ご飯の孤食」「食べるものがない」等のニーズを地域住民が発見し、解決の為に取り組みとして、夜ご飯を予約不要、無償で提供する「もりもり元気食堂」「延長版」を住民が自ら企画、実施できるようになった（5-2.）。

それでは、次に概要についてみていこう。

3-2-2. 概要

子どもサロン「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」は、給食のない夏休みに、西小学校区内の小中学生を主な対象として、予約制で実施する。午前9時頃から運営スタッフとして民生委員・児童委員、「見守りサポーター ながくて」、地域住民ボランティア、大学生らで集まり、食事の準備を行う。午前11時半頃から子ども達が集まり、サラダの盛り付けやデザート作り等を運営スタッフの指導の元手伝い、ともに食事をとる。その後、希望者のみそのまま会場に残り、大学生の協力の元夏休みの宿題を行う。

なお、運営委員会にて話し合った結果、「食事を作って一方的に提供する」のではなく、「子ども達にも適宜手伝ってもらいながら、一緒に料理を作り、食事作りに興味を持ってもらえる場」と位置付けることとした。

それでは、次に、『我が事』の意識の醸成（地域力強化検討会編、2017：6）がなされた第二期として、平成27年度及び平成28年度の実施状況についてみていきたい。

4. 「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」第二期

——「我が事」の意識醸成

4-1. 平成27年度の実践報告及び成果

平成27年度の実施回数及び参加人数、運営スタッフの人数については、以下の通りであった（表4-1）。

合計6日間開催し、83人が参加した。定員170人に対する参加率は48.8%であった。

成果としては、事故等なく無事開催できたことや、CSWに相談のあった不登校の児童の参加がみられたことが挙げられる。しかし、目的（3-2-1.）1. で挙げたような、新たに子育て不安を抱える世帯の発見、相談には至らず、また目的（3-2-1.）2. についても、貧困や孤食などのニーズを抱えた子ども及び世帯の参加は浮かび上がってはこなかった。

それでは、次に平成28年度の実施状況についてみていきたい。

表 4-1 「もりもり元気食堂」「さくさく宿題教室」開催状況

実施年度		平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
		第二期		第三期
実施回数		夏休み期間で 6 日		
元気食堂 参加人数	子ども (参加率)	83 (48.8%)	176 (97.8%)	187 (103.9%)
	定員	170	180	180
	大人	1	5	2
宿題教室 参加人数		31	85	90
運営 スタッフ	民生委員・児童委員	22	27	30
	地域ボランティア	12	8	34
	大学生	29	30	33
	社協・市職員	10	39	22

単位：人

4-2. 平成 28 年度の実践報告及び成果

平成 28 年度の実施回数及び参加人数、運営スタッフの人数については、上表の通りであった（表 4-1）。

平成 27 年度から、周知方法、メニュー等について運営委員会で話し合い、改善を図ったことから、前年度に比べ子どもの参加人数が 93 人増え、計 176 人となった。定員 180 人に対する参加率も 97.8% と大幅に上がった。宿題教室も同様、前年度に比べ 54 人増え 85 人の参加となった。西小地区社協の活動も 2 年目に入り、地域住民にも少しずつ知られてきた為、参加人数が増えたことが成果の一つとして挙げられる。予約は全日定員の 30 人を超え、多い日は 45 人以上の申込みがあった。また新聞社からの取材も受けることができた。

加えて、大きな成果の一つとして、複数の児童から新規に相談を受けることができたことが挙げられる（目的（3-2-1.）1. の達成）。発達障がいのある児童本人から相談を受け、CSW にて面接を行い、家族や小学校、主任児童委員、市役所や障がい者相談支援センター等関係機関と連携し支援体制を構築した。同時に、「さくさく宿題教室」中はこまめに休憩を入れ、また席の配置を工夫し、なるべく視角から入る情報を遮断し集中が続くようにした。そして、「見守りサポーター ながくて」による見守りが出来るよう調整を行った。これら CSW の対応については、地区社協運営委員会内で、民生委員・児童委員等の運営委員と共有した。この他、他学年の児

童と一緒に食べるのが苦手な子どもがいたり、カレーのルーが苦手な子どもがカレーの日に参加するなど、気になる子どもや世帯が複数見受けられた。これらについても運営委員会内で共有し、必要に応じて小学校や市役所等関係機関に情報提供を行った。CSW が運営委員会にて民生委員・児童委員等運営委員とケース概要及びその対応について共有することで、「『一人の課題から』、地域住民と関係機関が一緒になって解決するプロセスを繰り返して気づきと学び」（地域力強化検討会編、2017:7）を促し、「『我が事』の意識の醸成」（同上：6）を図っているといえよう。

さて、このように子どもサロン「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」を通じて「我が事」の意識の醸成が徐々になされてきたわけであるが、次に、実際に地域ニーズを住民が拾い、更には地域支援事業にまで発展させられるようになった第三期として、平成 29 年度の実施状況についてみていきたい。

5. 「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」第三期

——住民による地域ニーズの発見及び解決の 為の地域支援への展開

5-1. 平成 29 年度の実践報告及び成果

平成 29 年度の実施回数及び参加人数、運営スタッフ

の人数については、上表の通りであった(表4-1)。なお、チラシについては以下の通りである(巻末:図5-1, 5-2)。

平成29年度は、延べ人数ではなく実人数として、より多くの児童の参加を得る為に、児童1人につき2回までの受付とし、3回目以降はキャンセル待ち扱いとした。また、定員についてもキャンセル待ちを見越して定員+5人の35人まで申込みを受けた。これらの変更により、6日間の合計参加人数は前回から11人増え187人であった。定員に対する参加率は103.9%であった。宿題教室も同様、前年度に比べ5人増え90人の参加となった。

また、特筆すべき点として、民生委員・児童委員の参加が述べ30人あったことに加え、地域住民のボランティアが前回から26人増え、延べ34人の参加を得たことが挙げられる。これは、西小地区社協が設立して2年が経ち、子どもサロン「もりもり元気食堂」の実践を通じて運営委員を中心に「我が事」の意識の醸成(地域力強化検討会編、2017:6)がなされ、またそれが地域住民にも波及的に広がったことにより、参加する住民ボランティアが増えたのではないかと考えられる。そして今回、新たな新聞社の取材に加え、東海テレビや地元ケーブルテレビ、そして愛知県立大学教育福祉学部野田博也准教授の取材を受けた。また他市町の社協から、「子ども食堂」及び学習支援の運営方法について、講師としての依頼が入るようになった。

成果としては、元々市役所、主任児童委員らが介入を試みていた、支援の必要性がある世帯の参加を得ることができ、より細やかな生活状況や母子関係をCSW、民生委員・児童委員にて確認できたこと(目的(3-2-1.)1.の達成)や、貧困や孤食などのニーズのある子どもの参加を得て(目的(3-2-1.)2.の達成)、そこから民生委員・児童委員が「夜ご飯に食べるものがない」、「孤食である」というニーズがあることを発見し、民生委員・児童委員自ら企画・立案し、「もりもり元気食堂」“延長版”を開催できたこと(目的(3-2-1.)3.の達成)が挙げられる。

それでは、「もりもり元気食堂」“延長版”について、詳しくみていきたい。

5-2. 「もりもり元気食堂」“延長版”の開催

5-2-1. “延長版”の開催の経緯

子どもサロン「もりもり元気食堂」にて、民生委員・児童委員が、ある子どもとの食事のふとした会話の中で、以下の話を聞いたことがきっかけとなった。「お母さん、夜まで働いていることがあって、夜ご飯にパンを買ってきてくれるから一人で食べるんだ。でも、買うのを忘れちゃうこともあるんだ」¹³⁾。

これを受け、民生委員・児童委員からCSWに、「何とかしたい」と相談があった。「夜ご飯の孤食」、「食べるものがない」などのニーズがあり、また同様のニーズを抱えた子どもが他にもいる可能性もあり、協議の結果、「もりもり元気食堂」“延長版”を開催することとした。

急遽、運営スタッフである民生委員・児童委員や「見守りサポーター ながくて」らで集まり、上述のケースを共有し、“延長版”の開催について話し合った。

5-2-2. “延長版”の目的及び概要

民生委員・児童委員や「見守りサポーター ながくて」、CSWで“延長版”の目的、内容について話し合った。「夜ご飯に食べるものがない」、「孤食である」というニーズに対応する為に、夜、予約不要で、無償でご飯を食べられる場にする事とした。また周知に際しては、「孤食対策」等は前面に出さず、「地域の皆さまからの野菜、お米の寄付が余った為、感謝の意を込めて“延長版”を開催します」と謳うこととした。周知は、大々的に行うのではなく、あえて「もりもり元気食堂」内にて口頭で周知することと、会場にチラシ(巻末:図5-3)を掲示するだけとした。全体を通じて、「見えない化」をテーマとして、母子家庭の児童や孤食などのニーズを抱えている児童が、少しでも負い目を感じることなく参加できるような環境設定を重視し、話し合いを進めていった。

会場が、土曜日のみ午後9時まで開いている為、開催は土曜日とした。また会場の規定で小学生は午後5時までとしない為、開催時間は午後4時から午後9時までとした。参加者はその時間内に自由に参加し、自身で食事の用意、片付けをすることとして、民生委員・児童委員や「見守りサポーター ながくて」がその間ずっといることはしないこととした。今回、まずは試験的に

実施してみて、他にも同様のニーズを抱えた子どもがいるかについてアセスメントすることも目的の一つとした。

5-2-3. “延長版”の実践報告及び成果

参加人数については、3日間で子ども41人、大人13人であった。お米は一升炊き、全てなくなった日もあった。ご飯が余った日については、冷凍し、会場の冷凍庫に保管し、日中、こどもが自由に食べられるよう調整した。参加者としては、小学生、中学生、夜間勉強にきていた高校生、またCSWがケースとして関わっている親子等が参加した。小学生らについては、午後3時頃から会場にやってきて、豚汁やご飯が出来上がるのを待っている子どもも複数いた。

また成果として、新たに、母子家庭ではないが、親が共働きであり夜遅くまでご飯がない子どもや、母親はいるが「家で疲れて寝ている」といった子どもの参加も得ることができた（目的（3-2-1.）1. 及び2. の達成）。

“延長版”の開催を通じて、西小学校区にも実際に孤食、夜ご飯がないなどのニーズがある児童がいることが明らかとなり、同時に、民生委員・児童委員らとも実感としてそれを共有することができた。また、これらのニーズの発見から、解決方法の企画、話し合い、実施に至るまでのプロセスを、インフォーマルサポートとして民生委員・児童委員や「見守りサポーター ながくて」などの地域住民と協働で行うことで、運営する民生委員・児童委員や地域住民の発見機能及び解決力を向上させることができたことが、全体を通しての大きな成果であるといえる（目的（3-2-1.）3. の達成）。

5-3. 子どもサロン「もりもり元気食堂」の今後の課題

今後の課題としては、①開催頻度、②夜ご飯へのニーズへの対応、③発見機能の拡大が挙げられる。

①開催頻度については、現在、「もりもり元気食堂」及び“延長版”ともに給食のない夏休みの期間だけの開催となっており、定期的な開催には至っていない。これについては、今後、夏休み以外にも開催できるよう働きかけを行っていく必要があると考えられる¹⁴⁾。

②夜ご飯のニーズへの対応についても①同様、今回、

実際にニーズがあることはわかったが、同様のニーズのある子ども及び世帯はまだ潜在的に数多く存在すると考えられる。①に加え、いかにこれらのニーズを抱えた子ども及び世帯へ情報を届けるのか、小学校や行政等関係機関とも連携し検討する必要があると考えられる。

③発見機能の拡大については、今回、子育て不安軽減部会として、「子育て不安や悩みを抱えている世帯、また不安を抱えている子どもの声を拾えるようにしよう」と目標設定したが、加えて、障がいや病気等のある親をケアしている子どもを通じて、困り事を抱えている親を早期に発見し、早期対応につなげるということも可能であると考えられるだろう。例えば、精神障がい者のケアの担い手としては、これまで親が中心となってきたが、近年、子どもの存在も指摘されている（森田, 2010）。「ケアを担う子どもを発見し、必要な支援を得られるようアセスメントにつなげていく仕組みを、地域の中につくっていくことが必要」（森田, 2016）であり、子どもサロン「もりもり元気食堂」がその役割を担うことができるのではないかと考えられる。

6. 考察

6-1. 子どもの支援展開におけるCSWの機能

本稿では、地区社協を全世代・全対象型の地域包括ケアシステムの構築に向けた重要な取り組みとして位置付け、CSWを中心として実践を行っている長久手市社協の西小地区社協「子育て不安軽減部会」企画、「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」の実践を元に、その3年間の軌跡を辿った。ここでは、開催にあたっての企画・準備期間である初期、「我が事」の意識醸成がなされた第二期、実際に地域ニーズを住民が拾い、更には地域支援事業にまで発展させられるようになった第三期に分類し、その発展過程を追っていった。ここから、子どもの支援展開におけるCSWの機能について考えていきたい。

長久手市社協では、CSWが、子どもサロン「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」の具体的運営に関する相談だけではなく、そこで発見されたケース及び

その対応を民生委員・児童委員等地区社協の運営委員と共有していた。また日常業務としても、地区社協運営委員会においてCSWの相談ケース及びその対応を共有することで、個別支援から地域支援、仕組み作りというCSWの3つの役割（野村総合研究所編，2013：18）をも運営委員と共有し、「『一人の課題から』，地域住民と関係機関が一緒になって解決するプロセスを繰り返して気づきと学び」（地域力強化検討会編，2017：7）を促し、「『我が事』の意識の醸成」（同上：6）を図っていた。

これらの基盤により、単に社協職員として事業を行うのではなく、また単にNPOや一般企業が行政から事業委託を受けて事業を行うのではなく、地域住民に身近な存在であるソーシャルワーカーが地域住民とともに実施をすることで、「地域にとっての『触媒』としてのソーシャルワークの機能が、それぞれの『住民に身近な圏域』に存在」（同上：12）するようになったといえよう。

ここで重要な点として、これは、単にCSWがその「触媒」となっているわけではないということが挙げられる。すなわち、「地域にとっての『触媒』としてのソーシャルワークの機能」（同上：12）が、CSWの介入によって、住民に身近な民生委員・児童委員等地区社協活動に関わる地域住民に新たに“付与”されたといえる。

このように、CSWの支援展開として、住民のマネジメントによる地域包括ケアシステム構築の為の住民活動

の基盤を形成し、CSWの個別支援展開とこれら住民活動とを円環的に相互作用（交互作用）させることによって、“地域住民にソーシャルワーク機能を付与”させることが可能となる。これこそが、CSWによる子どもの支援展開における重要な機能であり、これによって子どもの為の地域包括ケアシステムの構築が推進されるといえよう。

6-2. 子どもの為の地域包括ケアシステム構築に向けたCSW及び子ども食堂の展開可能性

これまでみてきたように、住民とCSWとの協働で、CSWが個別支援と地域支援とを円環的に相互作用（交互作用）させることで、地域住民にソーシャルワーク機能が付与され、子どもに食事を安価に提供できるという場ができ（初期）、CSWが新たに相談を拾えることができるようになる（第二期）だけではなく、その場が新たな問題、課題やニーズの発見機能、そして問題解決機能を持つこととなった（第三期）。

ここで、その効果について数値で確認したい。平成27年度から28年度、29年度、そして“延長版”において、新たに発見され情報がつながったケース数は次の通りである。（図6-1）

このように、新たに発見され、つながったケース数は増えており、長久手市における地域包括ケアシステムの

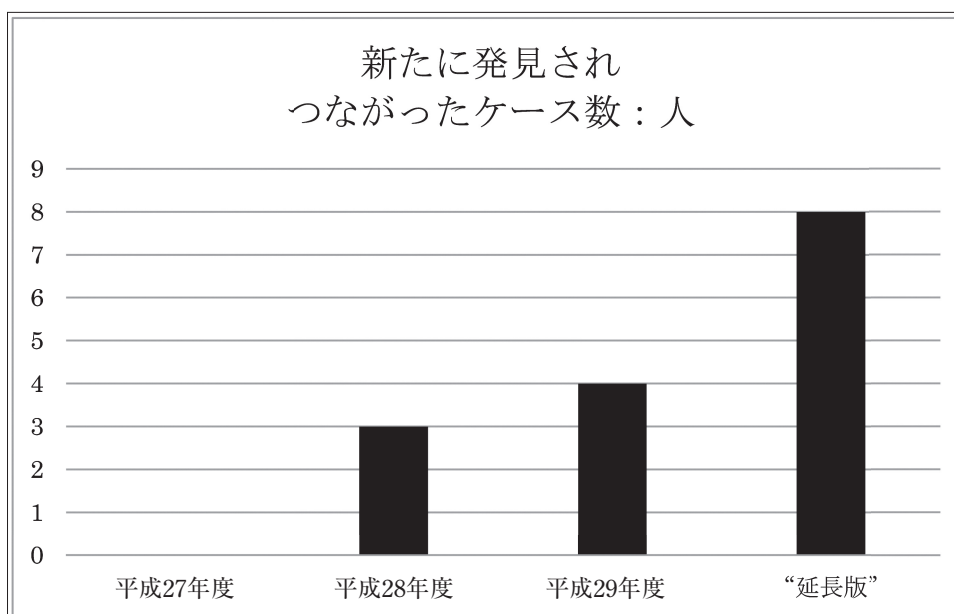


図 6-1 新たに発見され情報がつながったケース数

5つのシステム、つまり①早期発見システム、②つながりシステム、③個別支援システム、④地域支援システム、⑤人材育成システム（加藤・有間・松宮、2016）の内、①及び②のシステム構築が推進されていることが数値として明らかとなっている。

さて、これまで、加藤・有間・松宮（2015・2016）では、地域包括ケアシステム構築におけるCSWのあり方について論じてきた。地域包括ケアシステム構築をめぐる議論においてとりわけ重要な課題となるのは、「制度の狭間を支援するシステム」構築の為に、「ワーカーによって課題を解決するのではなく、ワーカーが中心となってシステムで解決すること」と、「住民の力を『制度の狭間』を支援するシステムにどのように位置づけるのか」（熊田、2015：66）という点である。CSWが主体となって地域包括ケアシステムを構築していくためには、「いかに社会福祉協議会の事業をCSWの機能として位置付け、システム化し、個別支援と連動させるか」（加藤・有間・松宮、2016：42）が重要であり、長久手市社協CSWの実践は、まさにその具体的実践例であり、CSWの機能を体現しているといえよう。

これまで子ども食堂の実践が、地域包括ケアシステムの構築、あるいは我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現との関連の中で議論されることは少なく、またそもそも子どもに対する地域包括ケアシステム構築の実践事例が少ない現状にある。しかし、子ども食堂は、“地域住民にソーシャルワーク機能を付与”させる機能を持ったCSWが介入することにより、単に食事の提供や学習支援をするだけではなく、我が事・丸ごと「地域共生社会」の実現に際して、特に「我が事」の意識の醸成の為の大きな一翼を担える可能性を秘めているのではないだろうか。

付 記

本稿は、JSPS科研費16K04084の助成を受けたものである。

注

- 1) 例えば、「地域包括ケアシステムを構築するための制度論等に関する調査研究事業報告書」（地域包括ケア研究会編、2014）、「地域包括ケアシステム構築へ向けた取り組み事例」（厚生

労働省編、2017）、「事例を通じて、我がまちの地域包括ケアを考えよう『地域包括ケアシステム』事例集〜できること探しの素材集〜」（株式会社日本総合研究所編、2014）、ほか。

- 2) 2017年6月21日に地域力強化検討会が発表した「社会福祉法改正案に関する国会での質疑について」（第8回地域力強化検討会）では、4月5日の衆・厚生労働委員会の法案質疑におけるやりとりにおいて、中島克仁委員の「地域共生社会と地域包括ケアシステムの関係性」への質問に対して、塩崎国務大臣が次の通り答えていることが示されている。「地域包括ケアシステムそのものが高齢者向けのことであるということとは変わらない…（中略）…地域共生社会につきましては、地域包括ケアシステムを包含する概念として、…（中略）…地域包括ケアシステムは、高齢期の支援を地域で包括的に確保するというもので…（中略）…地域共生社会は、必要な支援を包括的に提供するという考え方を、障害者、子供などへの支援や複合課題にも広げたもので…（中略）…地域包括ケアシステムのいわば上位概念とも言える」（地域力強化検討会編、2017：5）。

このように、地域共生社会は、地域包括ケアシステムという概念を高齢者だけではなく子どもなどへも広げた、いわば地域包括ケアシステムの拡大・深化版であるといえよう。なお、ここで、地域包括ケアシステムが「高齢者向け」とされているのは、介護保険法第五条第3項に地域包括ケアシステムが位置付けられていることによる法政策上での文脈であると考えられる。つまり、概念としての地域包括ケアシステムについては、これまで通り「元来、高齢者に限定されるものではなく、障害者や子供を含め、地域すべての住民にとっての仕組み」（地域包括ケア研究会編、2013：7）であるといえる。

- 3) 川越・栗林（2016：543）では、「NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」におけるCSWとの連携事例として、地域で、認知症の高齢者の女性が集まり、アクリル毛糸で編んだ食器洗いのスポンジをバザーで販売し、その収益の使い道をCSWが関わり考え、子ども食堂に寄付してもらうという形で連携を取っていることを紹介し、これを「子どもと高齢者がいい形で支え合っていて、まさに地域包括ケアの理想の姿」（同上：544）としている。
- 4) 加藤（2017）では、CSWの対象とする近隣とのトラブルやひきこもり、ゴミ屋敷等“制度の狭間”の課題を抱える人々は、単に「制度を紹介し、当てはめる」だけの「制度のマネジメント」に主軸が置かれる既存のソーシャルワークや、インフォーマル資源を開発するコミュニティワークの介入により「『制度の狭間』を埋める」（勝部、2016：176）だけでは支援は不十分であり、“制度の狭間”を、制度のみならず「空間、家族・地域・職場等のさまざまな『つながり』から排除された」（熊田、2015：59）“関係性”の課題として捉え、“制度の狭間”を取り巻く状況を次の通り整理した。すなわち、“制度の狭間”の課題を抱える人々の背景には、もともと発達障害などの生きづらさがあり、さらにそれに対する家族や友人・知人など周りの無理解による不適切な対応（注意叱責、からかい、無視など）が繰り返され、生育歴上の二次障害として、自己評価・自尊感情の低下、対人関係の歪みや適応上の問題を引き起こしている。さらには、併存精神障害として統合失調症、鬱病、双極性障害などの気分障害、不安障害、強迫性障害、パーソナリティ障害などが合併し、これらが深刻化することで“制度の狭間”の課

題を抱えるに至るのではないかと考えられる。そして、例えばゴミ屋敷状態による近隣住民との関係悪化や孤立等、“制度の狭間”の課題を抱えることによる家族関係の悪化、近隣住民とのトラブル等が起き、現在においても他者との“関係性”における二次障害が生じていると考えられる（巻末：図1-1）。

ソーシャルワーク理論モデルとしてこのように“制度の狭間”を捉え、その背景にある生育歴上の二次障害や、現在における地域住民等他者との“関係性”における二次障害に対して、個別支援と地域支援を連動させて支援を展開していくことが、CSWによる“関係性”に着目した“制度の狭間”支援のあり方であることを示した。

- 5) 長久手市社会福祉協議会では、平成26年3月から、「一人暮らし高齢者や75歳以上高齢者世帯の見守り、虐待や見守りが必要な人の早期発見を担う地域のアンテナ役となる『見守りサポーター ながくて』」を養成し、新しい見守り体制をつくることで、地域のつながりの再構築」（長久手市・社会福祉法人長久手市社会福祉協議会編、2014：68）を行っている。また「地域に見守りサポーターを養成し、地区社協の構成員としてさまざまな角度から、より多くの人の目で見守りができるようなシステムを構築」（同上：62）することがあわせてあげられている。「見守りサポーター ながくて」の養成は、地区社協の設置と同様、長久手市社協の重点プロジェクトの一つである。CSWが「見守りサポーター ながくて」を養成し、個別支援においても、相談者と「見守りサポーター ながくて」とをマッチングし、マネジメントしていくことで、全世代・全対象型の地域包括ケアシステム構築に向けた基盤の1つを形成している。
- 6) 長久手市社協では、「感度の良いコミュニティ」作りの為に、平成26年からCSWによる地域福祉学習会を行ってきた。テーマは、アルツハイマー型認知症、ピック病による認知症、レビー小体型認知症、閉じこもり（特に高齢者）、高齢者虐待、MCI（軽度認知機能障がい）、ひきこもり（特に若者）、統合失調症、ごみ屋敷、過剰多頭飼育、パーソナリティ障がい、うつ病と自死、アルコール依存症、子育て不安、発達障がい、乳幼児期の発達、交流分析によるストレスマネジメント等についてである。これらのテーマについてCSWが30分から1時間程度講話をし、その後意見交換を行う。地区社協設立準備の為に、民生委員・児童委員や自治会連合会役員に対して講話を行っているほか、地区社協設立後も、各テーマ部会活動として地域福祉学習会を行っており、地域住民とともに「地域で何ができるか」を話し合っている。

なお、地域福祉学習会では、「病気に対する啓発」だけではなく、「病気と本人の人柄とは別である」ということをも強調して、①早期発見の為に教育的啓発及び②偏見をなくすことの2点を主な目的として、CSWが資料を作成し、講話を行っている。長久手市社協では、全世代・全対象型の地域包括ケアシステムの構築において、CSWによる地域福祉学習会を非常に重要視している。

- 7) 子育て応援冊子『あさがお』は、西小地区社協子育て不安軽減部会として、CSWと「見守りサポーター ながくて」によって作成した冊子である。内容としては、CSW、地区社協の紹介、幸せホルモン「オキシトシン」や交流分析（ストローク）によるストレスマネジメント、M・マラーの乳幼児期の発達理論（分離・個体化理論）等の考え方について、また子育てサロンの

紹介等である。冊子の作成・配布を通じて、母親が「子育てマニュアル」やインターネットの情報に捉われず、自然な形で子育てができること、不安等を感じた際にはすぐにCSWに相談できること、そして地域で子育てをするという意識の醸成を図り母親が孤立しないようにすること等を目的としている。

- 8) 長久手市は、平均年齢が若く、転入者が多い特徴がある。子育て中の世帯が転居してくることも多く、子育て不安を抱えた世帯も少なくないと考えられる。実際、CSWとしても「最近、夫の転勤で引っ越してきたが、ママ友もおらず、実母とも離れてしまい、相談できる相手が身近にいない」という話を幾度となく聞く。これらのことから、いわゆる行政施策としての子育て支援だけでなく、子育て不安を抱えた世帯、あるいは不安を抱えている子どもの早期発見の為に取り組みとして、本企画を目玉企画として取り組んできた。

また、論者の担当する西小学校区では子どもサロン「もりもり元気食堂」を企画・運営したり、子育て応援冊子『あさがお』を作成・配布してきたが、小学校区ごとで取組みは変わっている。平成27年に2人目のCSWとして配置された職員が担当する北小学校区では、「にこくくく」と称して、親子で参加する食事作りの企画を通じて、民生委員・児童委員ら地区社協の運営委員と父母との話し合いの場を持ち、CSWがファシリテートしながら、地域における課題や、自分達でできる取組みについて話し合っており、地域住民とともに子どもの為に地域包括ケアシステムの構築の基盤作りを進めている。

- 9) NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークの栗林理事長も、『『うちの町には貧困の子はいない』という民生委員さんもまだいます』（川越・栗林、2016：547）と、同様の事例があることを報告している。
- 10) これまで長久手市社協では、企画書を作成し事業のプレゼンをするということがなかった為、論者にて企画書の様式を作成した。以降、新たに地区社協の事業等を実施する際は、1. 目的、2. 概要、3. 課題、4. 対策、そして必要に応じて5. スケジュールの5点を、A4用紙1枚もしくはA3用紙1枚で企画書を作成している。
- 11) 企画書における「3. 課題」や「4. 対策」及び各年度の検討課題等の詳細については、「実践報告」として次の機会に譲りたい。
- 12) 川越・栗林（2016：543）では、子どもの貧困について、「団らんのある暮らしや経験が落ちている子どもたちがいるということが、相対的貧困」であるとしている。
- 13) 山野（2016：373）では、「貧困状態にある子どもは朝食、夕食ともに親と一緒に食べる割合が少ない」ことが報告されている。
- 14) 平成29年11月現在、冬休みや春休みにも開催できるよう話し合いを行っている。

文 献

- 地域包括ケア研究会編、2013、「地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点」。
- 地域包括ケア研究会編、2014、「地域包括ケアシステムを構築するための制度論等に関する調査研究事業報告書」。
- 地域における住民主体の課題解決力強化・相談支援体制の在り方

- に関する検討会（地域力強化検討会）編，2017，「地域力強化検討会最終とりまとめ」。
- 藤沢良知，2016，「ひとり親世帯の子どもの貧困～飽食時代の格差・貧困をどう考えるか～」『学校給食』67（8）：78-80。
- 藤沢良知，2017，「子どもの貧困問題をどう考えるか～食生活・健康・生活面への影響を探る～」『学校給食』68（6）：78-80。
- 加藤昭宏・有間裕季・松宮朝，2015，「地域包括ケアシステムとコミュニティソーシャルワーカーの実践（上）」『人間発達学研究』6：13-26。
- 加藤昭宏・有間裕季・松宮朝，2016，「地域包括ケアシステムとコミュニティソーシャルワーカーの実践（下）」『人間発達学研究』7：31-49。
- 加藤昭宏，2017，「コミュニティソーシャルワーカーによる“制度の狭間”支援の展開可能性について（上）——個別支援（内的世界）と地域支援（外的世界）を連動させた二次障害及び“関係性”へのアプローチから——」『人間発達学研究』8：37-49。
- 勝部麗子，2016，『ひとりぼっちをつくらない [コミュニティソーシャルワーカーの仕事]』全国社会福祉協議会。
- 株式会社日本総合研究所編，2014，「事例を通じて，我がまの地域包括ケアを考えよう『地域包括ケアシステム』事例集成～できること探しの素材集～」。
- 川越正平・栗林知絵子，2016，「地域包括ケア対談 医療の言い分・介護の言い分 子ども食堂は地域の人をつなげる拠点になった」『医療と介護next：地域包括ケアをリードする』2（6）：542-547。
- 厚生労働省ホームページ，「地域包括ケアシステム構築へ向けた取組み事例」
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/model.pdf，2017年10月26日最終確認。
- 厚生労働省編，2008，「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」。
- 厚生労働省新たな福祉サービスのシステム等のあり方検討プロジェクトチーム編，2015，「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現—新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン—」。
- 熊田博喜，2015，「『制度の狭間』を支援するシステムとコミュニティソーシャルワーカーの機能」『ソーシャルワーク研究』41（1）：58-67。
- 松岡是伸，2017，「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践：地域における各機関・団体の連携とステイグマの払拭を願って」『地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報』（1）：109-124。
- 森田久美子，2010，「メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験—不安障がい親をケアする青年のライフストーリー—」『立正社会福祉研究』12：1-10。
- 森田久美子，2016，「精神障害のある親をケアする子どもと精神保健福祉士の役割」『精神保健福祉士』47（2）：100-103。
- 長久手市・社会福祉法人長久手市社会福祉協議会編，2014，『長久手市地域福祉計画・長久手市地域福祉活動計画』。
- 野村総合研究所編，2013，「コミュニティソーシャルワーカー（地域福祉コーディネーター）調査研究事業報告書」。
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会編，2010，「全社協福祉ビジョン2011 ともに生きる豊かな福祉社会をめざして」。
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会政策委員会編，2012，「新たな福祉課題・生活課題への対応と社会福祉法人の役割に関する検討会報告書」。
- 山野良一，2016，「むすびにかえて：子ども食堂と沖縄子どもの貧困調査から見えてくるもの」『チャイルドヘルス』19（5）：371-374。
- 吉田祐一郎，2016，「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察—地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて—」『四天王寺大学紀要』（65）：355-368。

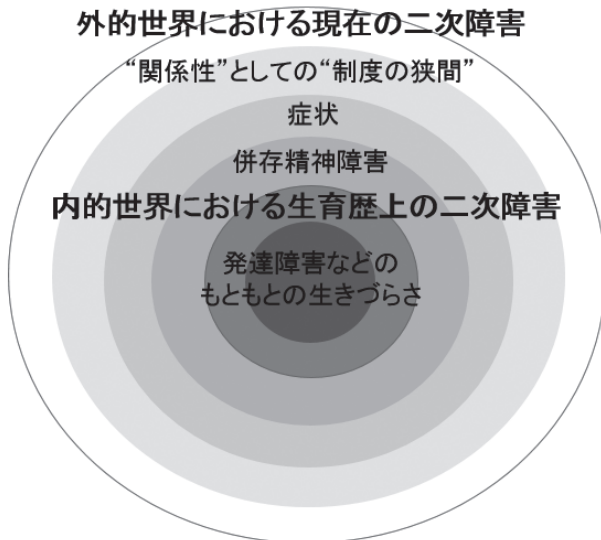


図 1-1 「関係性」の課題である「制度の狭間」と2つの二次障害についての仮説モデル（論者作成）

西小地区社協 子どもサロン 皆で作ろう！ 皆で食べよう！

もりもり元気食堂

7月26日(水)、28日(金)、8月2日(水)、4日(金)、8日(火)、9日(水)
とき： 11時30分～13時30分頃まで

ばしょ： 西小地区共生ステーション「西 ふらっと小屋」(五合池 2209)

おかね： 1日 250 円(当日お持ちください)

べんきよう： ご飯の他に、「さくさく宿題教室」として、大学生のボランティアさんが宿題を見てくれます。希望の方は、宿題と筆記用具をお持ちください。(13時30分頃～15時頃まで)

ちゅうい： ・アレルギーへの対応はできない場合もありますので、まずはご相談ください。
 ・定員は1日30名です。子ども1人につき2回までの申込みとし、3回申し込みはキャンセル待ち扱いとなります。
 ・料理のお手伝いをするので、タオルや、必要な方はエプロン、マスクなどをお持ちください。

7月5日～受付開始

問合せ・申込み先：長久手市社会福祉協議会 地域福祉係(月曜休館日)
0561-62-4700

図 5-1 平成 29 年度「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」チラシ表面（論者作成）

メニュー

7月26日(水)	肉汁たっぷり煮込みハンバーグ ◎野菜サラダ ごはん アイスクリーム
7月28日(金)	◎冷やし中華 ◎生春巻き ◎杏仁豆腐
8月2日(水)	◎野菜カレー ◎サラダ ◎フルーツゼリー
8月4日(金)	◎押し寿司 吸い物 ◎黒蜜わらび餅
8月8日(火)	ミートスパゲティ ◎冷製ポタージュスープ ◎ブラマンジェ
8月9日(水)	◎タコライス トマト冷製スープ ぜんざい

◎印は、子どもに料理を手伝っていただきます♪

スマイルポイントつきです

昨年同様、今年も「もりもり元気食堂」を開催します。「もりもり元気食堂」は、誰でも参加可能な子どもサロンです。子ども達が食の大切さ・楽しさを学ぶ場所になればと思います。「もりもり元気食堂」は、地域の皆様の応援で始めることができます。**当日のお手伝い(調理等)、食材の提供(野菜、果物)などしていただける方は、是非ご一報ください!!**

西小地区地区社会福祉協議会・西小地区まちづくり協議会

図 5-2 平成 29 年度「もりもり元気食堂」及び「さくさく宿題教室」チラシ裏面（論者作成）

売り切れごめん！

「もりもり元気食堂」延長版のお知らせ

もりもり元気食堂の参加者の親御様、お子様
 (共生ステーションにお越しの皆様)

もりもり元気食堂へのご参加、ご協力ありがとうございます。

食材の寄付、当日のお手伝いなど地域の皆様のご協力をたくさんいただきましたので、今回、余った食材で「もりもり元気食堂」延長版を開催します。

〇日時：8月12日(土)、19日(土)、26日(土)
 夕方16時～21時頃まで ※小学生のみでの参加は17時まで

〇場所：西小地区共生ステーション

〇費用：無料

☆予約は要りません。
 ☆ご飯、汁物等簡単なものを約20人分～作ります。
 ☆スタッフも数少ないですが、なるべくご自身での配膳、片付けをお願いします。
 ※小学生のみで参加頂く場合は17時までとなりますので、ご注意ください。

【お問い合わせ先】
 長久手市社会福祉協議会 地域福祉係 CSW 加藤 昭宏
 電話：0561-62-4700
 携帯：080-5818-4669

図 5-3 平成 29 年度「もりもり元気食堂」延長版チラシ（論者作成）